



美術作家
KEIKO・萬桂さん
豊岡市



「墨・Rock / Sin-dou (神いずる道)」

見るものを圧倒する独特の作風。豊岡市在住のKEIKO・萬桂さんは世界的にも珍しい墨を基調とした作品を描く美術作家である。

絵画の世界に目覚めたのは中学生の頃。地元の高校に入ると本格的に絵の勉強をしようと思い、東京にある多摩美術大学に進学した。大学では染織デザインを専攻し、卒業後も東京にとどまり、テキスタイルデザイナーとしての道を選んだ。

当時は小泉今日子のドレスデザイナーを手がけたり、パリへ渡るなど順風満帆。けれど、何か物足りなく、何か違うなと思った。本当に何を表現したいのかわからないまま時が過

思いを墨に込めて... 観るものを圧倒する こころを揺さぶる芸術

「89年に故郷に帰る決意をする。しかし、帰ってきたものの心の隙間は埋まらなかった。アクリル、パステル、ヨージシなどいろいろ試したが、どうもしくりこなかった。一時は全く違う分野の仕事に就き、芸術の世界から離れたこともあった。この時期が一番つらかった」と当時を振り返りKEIKOさんは話す。

そんなとき友人からお店に飾る絵を描いてほしいとの依頼。母親が書道塾を開いていたこともあり、小さい頃から慣れ親しんだ墨をなげに手にとり思いのままに描いた。

その瞬間、「これだ」と思った。今まで思い悩んでいたものがすべて吹き飛び、内面にたまっていたバレーが一気にキャンバスへと放出した。墨をあやつる美術作家・KEIKO・萬桂が誕生した瞬間だった。

今年の1月に東京の新宿三越で開いた個展、墨・Rock・KEIKO・萬桂の世界」でも、揺れ動く、激しい感情を表現した」というとおり、観客の魂を揺さぶる作品が並ぶ。筆をほしらせる時は一心不乱。宇宙からのエネルギーと、ストレートな自分の気持が一体となって作品は一気に描かれるという。

「但馬に帰ってきて本当によかったと思います。但馬の厳しい気候風土が作品にかなり影響をあたえていますね。但馬の人たちに少しでもバレーを与えられるような作品をもっともっとつくってみたいです」

今後の夢を聞くと、「ヒルの壁ぐらいの大きなものに作品を残したい」との答え。さらに、海外で個展を開くことが目標だそうだった。後日、メールでパリでの個展が決まったとの知らせが入った。彼女の夢はまだ始まったばかりだ。

写真やイラストから、フルカラー印刷や表紙制作、あらゆる印刷業務に対応する。第14号アパレル・ファッション雑誌を制作。

街を彩る。

従来のイメージや常識に伝える多様な演出。今、街がメディアに変わる。

カラービジョン

新しい世界を創る。人と人をつなぐ。

Quick Quality Cost 岩見印刷株式会社

【本社・伊豆シャングリー・マーケティングセンター】
兵庫県加東郡豊岡市北原7-1 TEL.0796-42-1200 (F)
【ホームページ】http://www011.kusasa.ne.jp/quickcost/ [e-mail] team@rock.mkanai.co.jp

【豊岡支店】TEL.079-23-4002 (F) 【神戸支店】TEL.078-294-4600
【京都支店】TEL.075-853-2977

丹土はねそ踊

刀と刀がぶつかりあう
その激しさが、
夜の祭りを盛り上げる

3分も踊れば息があがるほどの激しさをもち温泉町丹土のはねそ踊。丹土地区では子どもから大人、お年寄りまで踊れない人間はいないというほど住人に愛され、その伝統が今に受け継がれている。

この地域に「はねそ踊」が伝えられたのは戦国時代。田舎の豪士が我が家、我が身を守るため、家の子弟が剣術を教えたことに由来する。その後、桃山時代に歌舞伎が流行し、その音曲を取り入れて、仏前で亡き父の供養のために、剣術を踊ったことが始まりとされている。

仏の供養として始まったことから、毎年お盆の14、15日(現在は16日も踊る)に、地区の公民館前でヤグラを建てて盆踊り大会として踊られている。当日は一般的な手踊りの合間に、小学生・中学生・成人といった順番で2人、あるいは3人一組となって踊りを披露する。(2人の時は「立ち」と「受け」、3人の時は「受け」が2人)

最後の踊りになると、帰省者が刀の代わりにほづきを持って飛び入りで参加し、会場は大きな盛り上がりを見せる。

衣装は浴衣に、棒・懐剣・脇差・なぎなたなどを手にし、太鼓とお囃子に合わせて演ずる。その特徴は歌舞伎の影響を色濃く反映しており、顔の向け方・足の踏み方にも直線的なきめがある。一般的に頭を切り、六方を踏むと呼ばれ、元々剣術修行の一環だったこともあり、動作は俊敏で気迫が感じられる。

保存会の会長である田淵明夫さんの話では、毎年同じ相手で、気の合う人としが踊れません。踊りの最中は真剣そのもので、刀と刀がぶつかりあうほどの激しさです」と語る。踊りの芸題は、「宮城野信夫」「毛谷村六助」「鈴木主人」などが有名で、かつては他に数十種があったと言われている。そのほとんどが仇討ちをテーマにしたもので、現在は4種類ほどが踊られている。

踊り手は、その昔、女役も男性によつて演じられていたが、昭和46年に県無形文化財に指定された頃から、女性が進んで女役をこなして、村人総出で参加するようになった。それでも過疎化が進む地域だけに踊り手の数も減っており、保存会

温泉町丹土のはねそ踊は、毎年8月の14、15日に地元の公民館で踊られている。また、16日には県立但馬牧場公園でも披露される。



では後継者育成のため、お盆の1か月前に小学校へ指導に行く活動を通して伝統文化の保存に努めている。

保存会が発足したが、昭和12年。今では伝統芸能の保存会ほどの地域でもみられるが、当時としては大変珍しいこと。戦時中には今生の別れとなるかもしれない村の出征者が、村の想い出に「はねそ踊」を踊って戦地に赴いたという。丹土の人々にこれほど愛されている村の宝「はねそ踊」。これからも永遠に踊り継がれていくことは間違いないだろう。

協力：丹土はねそ踊保存会

会長 田淵明夫さん

中井武雄さん

涼しく着よう夏衣



きものことなら
くすのサハシ けいたに

★着付け教室★さるのマーナー教室
★着物のトータルコーディネート

豊岡市福田1番7-1 電話 24-9239
フリーダイヤル 0120-529-008

